

---

collect

チョコ・レット

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

collect

### 【Nコード】

N9292X

### 【作者名】

チヨコ・レット

### 【あらすじ】

不思議な力を持った魔法の石：【魔石】  
それを探し、収集するのが趣味の自称、魔石ハンターのミシー・ウオルク。

特技は走る事と、逃げる事と、逃走する事。

そんな彼女が目指すのは伝説の「賢者の石」だった。

これは魔法の石をめぐる、物語。

(短い連載です)

## プロローグ

草木の生えない荒れた荒野で風もないのに土煙が上がっていた。

「うはははっ！！やっばい、これは笑える」

チューブトップにホットパンツ、腰にウエストポーチと重そうな銃をぶら下げている女、ミシーは、ショートカットの赤い髪が乱れるのもかまわずに、全速力で走っていた。  
何故かと聞かれれば、彼女のことを追ってきている看守が何十人もいるからだ。

「捕まえるー！逃がすなー！ー！！」

後方でそう叫ぶ声が聞こえる。

「うはー、脱獄って思ったよりも大変なんだねえ」

感激したように言うと、ミシーは走りながら器用にウエストポーチを開くと、中から紅い石を取り出した。  
それを何の躊躇いもなくポイツと口に放り込んだ。

「ま、逃げ切るけど！」

ゴクンとソレを飲みこむ。

もちろん石は真っ直ぐに胃に落ちていった。  
次の瞬間、グンツとミシーの走る速度が上がる。

「うはぁぁぁー！！」

嬉しそうに叫びながら走る走る。

彼女が飲み込んだのは『アッパー』と呼ばれる魔石。

生物の運動能力を引き上げる力を持ち、飲み込むことで約五分間だけ、全身の運動能力を上昇させる魔法の石。この世界の特産物の一つ。

「追いつけるもんなら、追いついてみるってーの　バアアアアアアアア  
アカ!!!」

笑い声を上げながら、後ろを向いてアツカンベー！

みるみる遠ざかっていく兵士達にそれが見えたかどうかは定かではなかった。

## プロローグ（後書き）

ツイッターで思いついて、ある方に後押しされて書き始めました。下手くそな文章ですが、気に入っていただければ幸いです。

## 1 出会って走って

今時、どこの町でも見かける【WANTED】と書かれた張り紙。その中に赤いシヨートカットに露出のやけに高い服を着た女、ミシィ・ウォルロの名前があった。

「うはは、ついに私も指名手配犯かあ」

自分の手配書の前で悠長にそんな事を言えるのは、よっぽどの強者が馬鹿のどちらかだろう。

「もらっちゃえ」

ベリツと自分の手配書を剥して、二つに折るとポケットに入れた。

「記念、記念」

上機嫌でそう呟く姿を見るかぎり、彼女はどつやら後者バカなのだろう。

ミシィは今、この国有数の都の薄暗い裏路地にいた。

脱獄して看守をふりきって1日だったが、監獄の対応は早かった。手配書を作り、あつというまにミシィは指名手配犯になってしまったのだ。

「ま、コソコソしてもしかたないよねえ」

湿っぽい路地に居る必要はないと、暖かい日の光が差す表通りになる。

「はー、うん。やっぱりシャバの空気はサイコー!！」

時間は昼時。人で溢れる通りをミシーは堂々と歩きだした。

けれど、ミシーに気づく人間は居ない。日常的に指名手配犯を探そうなんて思っている人でなければ意外と気づかれないものなのだ。

「さーで、新しい服でも…ん？」

ミシーの目線になにやら人の波が掻き分けられていくのが見える。

「なに？都の兵士??」

鎧をガチャつかせながらこちらに向かって走ってくる数名の兵士。

ミシーは一瞬ギクリとしたが

「待て待てー!!！」

「逃がすなー！」

と声を上げて、何かを追いかけている様子を見てホッとした。どうやら他の犯罪者を追うのに忙しいようだ。

(一体、どんなやつを…)

キョロキョロと辺りを見渡し、兵士が追っている人間を探す。

(あー、あれか)

黒いボロボロのローブを纏いフードを被った男が兵士から逃げようと人の波を掻き分けて走っていた。

「待てー！」

兵士は叫びながら男に手をのばす。

「っー！」

その手がロープの裾を掴み、男は体が引っ張られるのを感じたが、力任せに前に進んだ。

その弾みに男のフードが外れ、顔が露になった。

「！」

ミシーは男の顔を見た途端、弾かれたように男に向かって走っていた。

「ちょっと、まったああああ！！」

兵士と男は自分達に向かって全力疾走してくる女性に、ポカンとした表情を浮かべた。

「ていやーっー！」

ミシーはいきよいよく兵士と男の間に突っ込むと男の手をとった。

「！？」

男は目を白黒させながらミシーを見た。見ず知らずの女性がいきなり走ってきたかと思えば、手をとってきたのだから。



「き、貴様！なにをしている！」

「そいつは、指名手配は……！」

兵士はそこまで言っただけで気づいたらしい。ミシーはニヤッと笑って高らかに言った。

「私も、ですけど」

なにか？とミシーはウエストポーチから何かを取りだし、思いっきり地面に叩きつけた。

その瞬間に真っ白な煙がその場にいる人間の視界を奪った。

そしてミシーは男の手を掴んで走り出した……。

1 出会って走って(後書き)

ミシーがハイテンションな女性だとわかっていただければいいなと  
……(汗)

## 2 逃げた先で

ミシーはキヨロキヨロと窓から辺りを見渡し、兵士をまいたことを確認するとほっと息をはいた。

「やー、ちゃんと逃げ切れた〜。他人連れて逃げんの初めてだったからちよつと、心配だったんだよね〜」

都の外れにある小さな林の中で発見したボロい小屋の中に、ミシーと男はいた。

「……なぜ？」

黙って立っていた男は口を開いた。

「ん、なぜとは？」

ミシーが振り返り、聞き返すと、男は警戒するようにミシーから距離をとった。

「なぜ、俺を助けた？」

その疑問はもつともだった。見ず知らずの男、しかも兵士に終われている人間を何の目的も無く助けるなど、理由や企みがあるのではと疑うのは当然だ。

「君がイケメンだったから」  
「……」

確かに男のかつこよかった。少し長い黒髪に整った顔立ち。ボロいがローブがよく似合う。

ミシーはパチコーンと星を飛ばしたが痛く冷たい目で見られた。

「じょーだん。私は、意味もなく人助けするほど善人じゃないから正直に言うよ。君、グレイ・フルステルだね？」

「！」

男は自分の名前を言い当てられ驚いたように目を見開いた。その様子を見てやっぱりねと呟く

「10年前、突然滅んだ王国の王族の最後の生き残り…だっけ？」  
「……そうだ」

男、グレイはミシーを疑う眼差しを強めた。なんだ、この女は…と  
「私の集めてるものを調べればすぐに君の一族にあたるよ、そんな怖い顔しないでほしーんだけど」

「魔石……か？」  
「そ」

ミシーはバツと両手を広げ、グレイに自己紹介した。

「このたび、第一級指名手配犯になりました。人呼んで魔石ハンターのミシー・ウォルロです！」

「グレイ、グレイ・フルステル。あんた、何が目的だ？」

ミシーは腕を下ろすと素直に答えた。

「“賢者の石”へ続く情報」

「なるほどな…」

グレイはミシীর目的が分かるなり、疲れたように腰を下ろした。

「残念ながら、俺は知らん」

「へっ!?!」

ミシীর驚きすつとんきょんな声をあげた。

「うそ!?!だつて、だつて、フルステルの一族は……」

「代々、賢者の石を護る一族。だろ?」

「そう!それ!なんで、一族の最後の生き残りがしらないの!?!」

「賢者の石は10年前、王国が滅びると同時に姿を消したよ。守りの地から」

グレイは溜め息をつき、ミシーを見た。

「助けてくれたことにはお礼を言う。ありがとう。だけど、俺はあなたの望む情報は持ってない」

「助け損!?!うそ、私、走り損!?!」

「ああ」

グレイは頷いた。

そして立ち上がると、呆然とするミシীর横を通り、扉に手をかけた。

「じゃあ、そういうことだ。俺は行くぞ」

「……すつとーいーぷー!」

ハツと我にかえり、ミシীরグレイのローブの裾を掴んだ。

「まだ、何かあるか？」

「あるっつーの！大ありだよ！」

ミシーはジーッとグレイを見ると聞いた。

「なんで都の兵士に追われてる……？」

「っ！」

ミシーは最初から不思議でたまらなかった。なぜ、グレイは都の兵士に追われていたのか。兵士は彼を指名手配犯と言った。一体、何をしたのだ。

「それは……」

「それは、彼の力が必要だからだよ。第一級指名手配犯、ミシー殿」  
そう言っつて扉を開き、入ってきたのは兵士と金髪をオールバックにした目付きの鋭い男だった。

「はじめまして。帝国部隊、部隊長のハイドと申します」

頭を深々と下げ丁寧にお辞儀をするが、どうも嘘くさく見えた。

（小屋に入ったのは失敗だった……）

ミシーは唇を噛む。まさか、こんなお偉いどころが現れるとは予想すらしてなかったからだ。

「で、部隊長様はなんの御用で？」

茶化すように言ってみた。ハイドはそれにニコリと笑った。

(…目が笑ってないっの。目が！)

「お二人を帝国に招待するよう、王に言い渡されたましたのでお迎えにあがりました」

「「は？」」

ミシーとグレイ。出会って数分の二人に思わぬ招待状が届いた瞬間だった。

## 2 逃げた先で（後書き）

盛り込みすぎた…テンポ早めにすすめたかったから、ちょっと色々盛り込みすぎた…次回はゆっくり進めます…



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9292x/>

---

collect

2011年12月11日11時51分発行